A New Hybrid of Carex in Aniai, Ani-machi, Akita Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00055698

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



J. Phytogeogr. & Taxon.
40 : 75-78, 1992

藤原陸夫*・松田義徳**：秋田県阿仁合（阿仁町）産スゲ属の新雑種

Rikuo FUJIWARA* and Yoshinori MATSUDA**：

A New Hybrid of *Carex* in Aniai, Ani-machi, Akita Prefecture

Abstract

Carex ×*aniaiensis*, a putative natural hybrid between *C. podogyna* and *C. sadoensis*, collected from Aniai, Ani-machi in Akita Prefecture, northern part of Japan, is reported.

In this new plant, the external morphology except the shape of spikelets is similar to that of *C. podogyna*, and the characteristics of stigmas and pistillate spikelets are similar to that of *C. sadoensis*. The shape of utricles and pistillate scales possesses intermediate features between putative parents. Achenes do not mature at all.

This new hybrid, however, is distinguished from *C. podogyna* by having the pistillate spikelets which are cylindrical, erect and sessile or slightly sessile, smaller utricles with shorter pedicels and longer stigmas. It differs from *C. sadoensis* in having the rhizomes which are densely fasciculate and lack stolons, wider leaves, bigger utricles with seturae on the margins.

Key Words: *Carex* ×*aniaiensis*—*C. podogyna* × *C. sadoensis*—New hybrid

秋田県阿仁町荒瀬川の渓谷において，タヌキラン *C. podogyna* とサドスゲ *C. sadoensis* の自然雑種と推定される新植物を発見した。タヌキランとサドスゲは日本固有種および準固有種で，主として中部地方以北の日本海側に分布する（玉城・秋山・里見・望月，1968）。

タヌキラン（クロボスゲ節Sect. *Atratae*）は，本州北部では一般に急傾斜の湿った岩隙に生育し，花後，葉が著しく伸長し岩壁から下垂して，特異な景観を呈する。秋田県における分布は，山地型を示し，男鹿半島を除き全域的であるが普通品ではない。秋田県産のタヌキランは，果胞の先端（口部）がより深く2裂するフタマタタヌキランform. *aristodentata* KÜKENTH.（秋山，1955）と思われるが，裂片の長さやその開度は変化が多い。果胞の表面が紫黒色に着色する度合いも変化が多く，これに起因する雌小穂全体の外観が紫黒色の個体と帯紫淡緑色の個体が同所的に観察される場合がある。タヌキランを一方の親と考定される自然雑種として，アポイタヌキラン *C.* ×*apoiensis*（コタヌキラン×タヌキラン），オオタヌキラン *C.* ×*caudatifrons*（タヌキラン×ミヤマクロスゲ），タヌキナルコ *C.* ×*hosoii*（ナルコスゲ×タヌキラン），ナガエスゲ *C.* ×*otayae*（タテヤマスゲ×タヌキラン），オクタヌキラン *C.* ×*uzenensis*（タヌキラン×タニガワスゲ）などが知られている（KOYAMA, 1962；杉本 1973）。

サドスゲ（アゼスゲ節 Sect. *Carex*）は，湿原，渓流辺の砂泥地，山間の水田側溝など生育立地の範囲が広い。秋田県における分布は，男鹿半島を除き全域的であり，やや広汎な生育立地を反映して普遍的に産する。サドスゲを一方の親と考定される自然雑種として，ヤシマスゲ *C.* ×*paludicola*（サドスゲ×アゼスゲ），サドスゲモドキ *C.* ×*pseudosadoensis*（ヤマタヌキラン×サドスゲ）があり（KOYAMA, 1962；杉本1973），近年，カヅノスゲ *C.* ×*akitaensis*（ホロムイスゲ×サドスゲ），モリヨシスゲ *C.* ×*moriyoshiensis*（ナルコスゲ×サドスゲ）が報告されている（藤原，1987；藤原・松田，1991）。秋田県産のスゲ属植物は91種6雑種が記録されているが（藤原，1991），5雑種はタヌキランあるいはサドスゲのいずれかを親としていることから，この両種は種間交雑が比較的容易な植物と推測できる。

新雑種アニアイスゲは，渓岸の岩上で数株を確認した。本地域において，両親と推定されるタヌキラ

*〒010 秋田県秋田市中通6-6-36 秋田県立秋田東高等学校 Akita Higashi High School, Nakadori 6-6-36, Akita 010, Japan.
**〒012 秋田県湯沢市新町27 秋田県立湯沢高等学校 Yuzawa High School, Shin-machi 27, Yuzawa, Akita, Pref. 012, Japan.

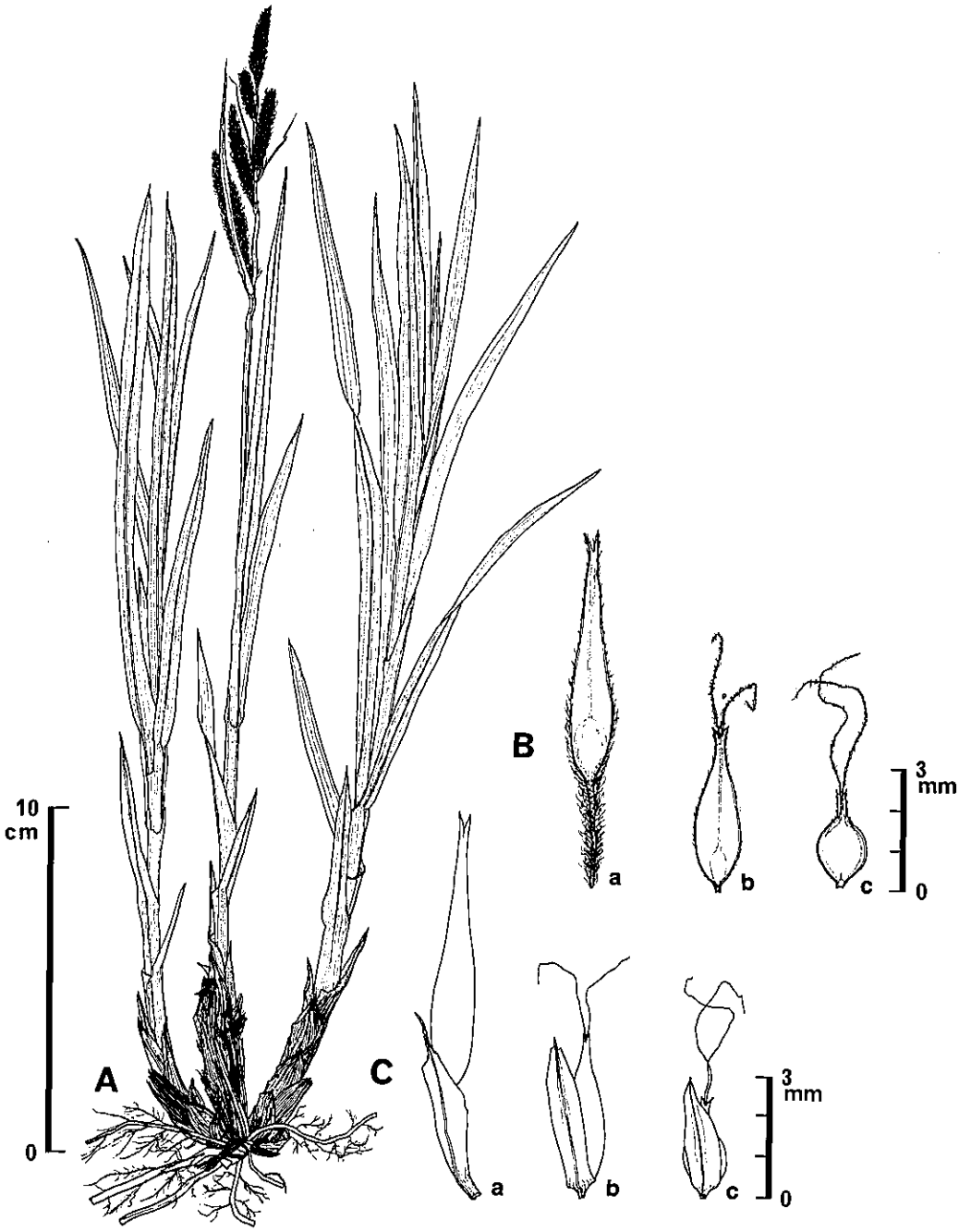


Fig. 1. *Carex* ×*aniaiensis*.
A : Habit, B : Utricles, C : Utricles and pistillate scales.
a : *C. podogyna*, b : *C.* ×*aniaiensis*, c : *C. sadoensis*
All were collected at Ani-machi, Akita Prefecture.

ンとサドスゲは，前者が降雨時に表流水を生じる岩壁に，後者が渓畔の砂泥地に普通に見られる。

アニアイスゲは，強固な地下部から密に叢生し，匍枝を欠くこと，葉身の幅が1 cm前後あり葉鞘部分も太いこと，稈基部の鞘が褐色で帯赤色部分があることなど，小穂以外の茎葉の外観はタヌキランを想わせる。雌小穂は円柱形で，ほとんど無柄で直立すること，果胞の柄は短く長さ0.2−0.3 mmで無毛であること，褐色の細い柱頭が果胞より4 mm程抽出し宿存性であることなどの形質はサドスゲに類似

Table 1. Morphological comparison among three sedges.

	C. podogyna タヌキラン	*C. ×aniaiensis* アニアイスゲ	*C. sadoensis* サドスゲ
根　茎	叢生，匍枝なし	叢生，匍枝なし	匍枝あり
稈基部の幅（mm）	10	8	5
葉身の幅（mm）	5—12	6—12	3—4
雌小穂：柄	長柄	やや無柄	やや無柄
形状	楕円形—球形・下垂	円柱形・直立	円柱形・直立
雌花鱗片：形	披針形・短芒端	長楕円形・短芒端	披針状長楕円形・鋭頭
長さ（mm）	4.5—5	3.5—4	3
果苞：形	狭披針形	披針形	卵状楕円形
長さ（mm）	9—10	4	2.5（—3）
柄の長さ（mm）	2—2.5	0.2—0.3	0.1
柱頭：長さ（mm）	4	5	5—7

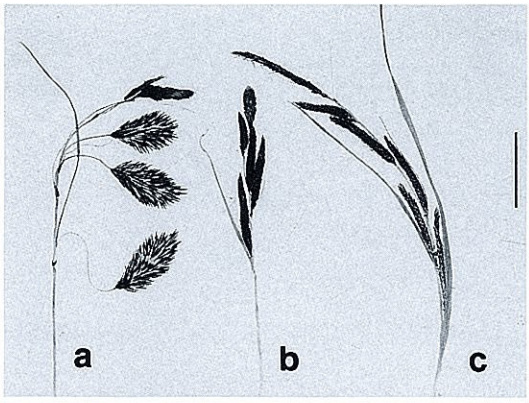


Fig. 2. Comparison of spikelets among three sedges. a : *C. podogyna,* b : *C. ×aniaiensis*, c : *C. sadoensis*
All were collected at Ani-machi, Akita Prefecture. Bar indicates 3cm.

する。とくに柱頭の形質は近縁のスゲ属植物に比べサドスゲに特徴的なものである。雌花鱗片の長さと果胞の長さは両親の中間にあり，鱗片と果胞の長さはともに約4mmでほぼ等長である（Fig. 1-C）。果胞は長楕円状披針形で縁辺には両親の中間的な形質と量の刺状毛を生じる（Fig. 1-B）。

アニアイスゲは，前述のようにタヌキランの形質とサドスゲの形質，両者の中間形質を合わせてもつ。主な形態的特徴を表—1に示した。果は全く発達せず不稔と考えられ，雑種性を示唆している。

和名は採集地の旧町名阿仁合町に因む。なお「阿仁合」は新第三紀中新世前期の阿仁合型植物群の模式地として著名である。

Carex ×aniaiensis FUJIWARA et Y. MATSUDA, hybr. nov.

Carex podogyna FRANCH. et SAVAT. × *Carex sadoensis* FRANCH.

Rhizoma firmum dense caespitosum estoloniferum. Culmus ca. 40cm altus erectus acute triqueter superne scabriusculus. Folia complanata flaccida in florescentia ca. 35cm longa 6-12mm lata utrinque margineque scabra subtus conferte mamillata, ligulis cinnamomeis, vaginis basalibus aphyllis duriusculis brunneis partim rufescentibus demum paulo reticulatofibrosis. Bracteae imae foliaceae evaginatae 5-10cm longae ca. 2mm latae superioribus echinaceis. Spiculae 5 subconfertae erectae, terminalibus masculis breviter cylindraceis 2-2.5cm longis ca. 5mm in diametro, squamis masculis oblanceolatis obtusatis ca. 4mm longis ca. 1mm latis brunneis nervis viridescentibus, lateralibus femineis sessilibus vel subsessilibus cylindraceis 2. 5-4cm longis 4-5mm in diametro, squamis femineis oblongis ca. 4mm longis ca. 1mm latis acuminatis vel obtusatis breviaristatis fuscopurpureis nervis viridescentibus. Utriculi brevissime stipitati leptomembranacei lanceolati compressi ca. 4mm longi ca. 1mm lati viridescentes superne purpurini, utrinque margineque setulosi, rostro scabro, ore bidentato scabro. Styli tenues, stigmatibus 2 brunneis tenuissimis longissimis ca. 5mm longis persistentibus. Achaena immaturata. Cum *Carice podogynae* et *C. sadoensi* haec hybrida nova comparanda est: ab anteriore spiculis femineis sessilibus vel subsessilibus cylindraceis erectis, utriculis minoribus stipitellis brevioribus glabris, stigmatibus longioribus differt, a posteriore

rhizomatibus firmis dense caespitosis estoloniferis, foliis latioribus, utriculis maioribus margineque setulosis differt.

Nom. Jap. Aniai-suge.

Hab. in Japonia-Pref. Akita: Arase-gawa ca. 300m alt. Ani-machi. (R. FUJIWARA, die 31 mense maio anno 1987, Holotypus in KANA 156037)

引用文献

秋山茂雄. 1955. 極東亜産スゲ属植物. 257pp. 北海道大学.

藤原陸夫. 1987. 秋田県産スゲ属の新雑種. 植物地理・分類研究 **35**: 81-82.

——. 1991. 秋田県植物目録. 第3版. 165pp. 秋田植生研究会. 秋田.

——. 松田義徳. 1991. 秋田県森吉山産スゲ属の新雑種. 植物地理・分類研究. **39**: 9-11.

北村四郎・村田　源・小山鐵夫. 1964. 原色日本植物図鑑. 草本編III・単子葉類. 464pp. 保育社.

KOYAMA, T. 1962. Classification of the Family Cyperaceae (2). Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo. III. 8(4): 151-278.

OHWI, J. 1936. Cyperaceae Japonicae I. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. XI: 229-530.

大井次三郎. 1956. 日本植物誌. 1383pp. 至文堂.

杉本順一. 1973. 日本草本植物総検索誌. II単子葉編. 630pp. 井上書店.

玉城松栄・秋山茂雄・里見信生・望月陸夫. 1968. 日本産スゲ属植物の分布(1). 金沢大学理学部付属植物園年報 **1**: 4-13.

吉川純幹. 1957. 日本産スゲ属植物図譜. 第壱巻. 141pp. 北陸の植物の会.

(Received April 13, 1992)

○ **豊国秀夫博士を悼む（里見信生）**　Nobuo SATOMI: Obituary of the Late Dr. Hideo TOYOKUNI

平成4年(1992) 9月26日，豊国秀夫さんが御亡くなりになられたと承り，吾が耳を疑いつつ，新聞を見ると，そこには御逝去を記した冷やかな活字が並んで居りました。御年60才ですから，今後の御活躍を御期待申上げて居りましたし，本誌においても，編集委員として，益々御支援いただかねばならぬ方であるだけに，真に残念至極に存じます。心から御冥福を御祈り致したいと存じます。

私は昭和29年(1954)以来，御交誼いただきましたが，当時，故人は北海道大学理学部に御存学中で，始めて本誌の第3巻第2号に“北海道天塩国暑寒別岳高地植物誌概要”を御投稿下さいました。その後，それが御縁で多数の御論文を御送り下さいました。中でも“北海道の超塩基性岩植物に就いて”は御労作で，9回にわたり連載されました。

今，故人を追憶して，思い出に浮ぶ一つの笑話があります。それは始めてお目にかかった時の事で，稲垣貫一さんと御一緒でしたが，私は稲垣さんは私より年長で，豊国さんは私より年少と承知していたことから，服装からの印象で(稲垣さんは赤いネクタイを締め，全体若づくりであったのに対し，豊国さんは黒っぽい姿で，年とって見えました)，御二人を取違って應待してしまいました。あの世への旅中，この話をお耳にされたら，さぞ苦笑されることでしょう。(〒921 金沢市久安4-359　Hisayasu 4-359, Kanazawa, Ishikawa 921, Japan)

○ **豊国さんを悼む（清水建美）**　Tatemi SHIMIZU: Obituary of the Late Dr. TOYOKUNI

当学会の編集委員の一人豊国秀夫さんが，病気のため9月26日に亡くなられた。

私が畏友豊国さんに初めて出会ったのは昭和30年の夏，礼文島だった。その年，私は単身長期の北海道採集旅行中であったが，以来，親しくお付き合いを頂くことになった。昭和52年の2月には旭川大学から信州大学にお迎えすべく，雪の中を旭川に出向き一晩植物談義に花を咲かせたこと，昭和54年6－8月には海外学術調査でタイ国で3か月をともにしたことなど，けっして忘れることはできない。そして今年の1月，松本市郊外浅間温泉の種生物学会でお会いしたのが最後になってしまった。その折りはとても病気とは見えないほどお元気であったし，信州大学の関係者も病気のことは一言も言わなかった。6月に講義に信州大学を訪れたときは，しばらく体調を悪くされていたが，退院され7月には集中的に講義をされるとのことであった。そんなわけで，お見舞いにもいかずじまいとなってしまったのが何とも口惜しい。

豊国さんは自他ともに許すラテン語の大家であるばかりでなく，語学の虫であった。自宅にはロシア文字のタイプライターまでそなえ，羅・露・英・独・仏の読み書きは自由になされていた様子であった。タイでは自らタイ語をあしらったTシャツを楽しんでおられたのが目に浮ぶ。学会としても，ラテン語の校閲者を失ったのは大きな痛手である。それにしても，まだ10才の愛息を残して行かれたのは何よりも心残りではなかったかと思われる。豊国さんのご冥福をお祈りするとともに，御遺族のご健闘を心から念ずる次第である。(〒921 金沢市角間町金沢大学理学部　Faculty of Science, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa, Ishikawa 920-11, Japan)